

質 疑 応 答

1 ことばの問題について

(1) 発音・よみ方

「しち」か「ひち」か

【問】 「七」「質」は「しち」がほんとうか、「ひち」がほんとうか。東京で「しち」というのはなまりではありませんか。

【答】 「しち」が正しいのです。大阪の電柱広告で「ひちや」とあるのを見かけましたが、あれは方言的発音によったもので、その土地ではそれで通用しているのですが、全国的共通を目的とする標準語としては、「しちや」と書くのが正しいのです。東京方言の「ひーし」のなまりは次のようなものです。

東京方言のなまり	しと	ひと（正）
	しとつ	ひとつ（正）
	しばち	ひばち（正）

「センセイ」か「センセー」か

【問】 わたしたちの話合いで次の二つの意見が出たのですが、どちらが妥当でしょうか。

「先生」「生徒」「映画」などの発音について：

- (1) これらにふりがなをするときには「せんせい」「せいと」「えいが」とふるのであるから、読みも〔センセイ〕〔セイト〕〔エイガ〕とはっきり読ませるべきである。
- (2) ふりがなは「せんせい」「せいと」「えいが」とふっても、読むときは自然に〔センセー〕〔セート〕〔エーガ〕と読むように指導すべきではないか。

【答】 このような字音語（漢語）の読み方について、現在、日本には、

- (1) はっきり〔センセイ〕と発音する地方と
- (2) 〔センセー〕をおもに、知らず知らず〔センセイ〕とも発音する地方

とがあります。それゆえ、一般的にいて、表記は「せんせい」であるが、発音は〔センセー〕から〔センセイ〕までの幅を認めて、生徒の自然の発音にまかせる（ぜひこうでなければならぬとはいわない。）というのが妥当な態度ではないでしょうか。大勢としては〔ei>ê〕の方向にあることは認められますが。（参考：ある外国人は〔ê〕を発音しにくいといい、ある外国人は〔ê〕を発音しやすいといいます。）

この点をやかましくいうのは、字でいえば「木」の縦棒のはねをやかましくいて、それを「正・誤」の対象とするのと同じ趣があります。

「木」の字のはねは、筆勢による連綿であって、その字で

必ずはねなければならないということはないのですから、これははねなくても、また自然の筆勢ではねがついても、どちらも正しい木の字です。そのように、「先生」は〔センセー〕でも〔センセイ〕でも、ことばとしての「正しさ」は失われないわけです。

ダ行音の語とラ行音の語の使い分け

【問】 長崎県（彼杵郡式見）の漁村ですが、ダ行音とラ行音との使い分けに困難を感じることも多くて困ります。テープにとったりなどしていろいろ苦心するのですが、どうしてもできないらしいのです。その点で優秀児も卑屈になる傾向も見えます。適当な教育方法はないものでしょうか。

【答】 〔d〕と〔r〕とは同じく舌先を使って出す、よく似た音ですから、その区別をはっきりさせることがむずかしく、そうした地方は他にもあります。たとえば島根県など。

一般に発音の教育には、何よりも気長にやることがたいせつです。

〔d〕は、舌先を上あごの歯ぐきの裏から離すときに少し重くし、〔r〕は反対に軽く「はじく」という気持でやってみてください。

〔d〕を閉鎖音（とじ音）または破裂音といい、〔r〕を弾音（はじき音）というのは、そうした発音上の気持を表わ

したものです。

なお、発音の教育には、第1に耳からの聞き分けをまず卒業させ、第2に「かな」または「ローマ字」での書き分けを卒業させ、それから第3に発音上の区別に導いていくのが順序だとされています。

連声について

【問】 教科書に「反応」「順応」「感応」とありますが、これらは「反のう」「順のう」「感のう」と書くべきであると思いますが、どうですか。

【答】 「皇」には「こう」と「おう」との二つの音があげてあり、その「おう」を「天皇」では「てんのう」と読みます。このような現象を「連声」と申します。いわゆる「連濁」も広い意味での連声です。

「反応」の「はんのう」もこれと同じですから、それでさしつかえありません。

「落ちる」と「落っこちる」

【問】 「落ちる」を東京で「落っこちる」といいますが、標準語でしょうか。

また、それはどうしてそういうようになったのでしょうか。

【答】 標準語とは、いつ、どこで、だれが、だれに向かって話してもよく、全国的に共通で、対外的には日本語を代表することばをいうのですから、「落ちる」を「落っこちる」というのなどは標準語とはいえません。

つぎに、なぜそういう言い方ができたかというに、それは関東ぶりの強める言い方なのです。

では、なぜ「落ちる」が「落っこちる」になるかということについては、これまで二つの説があるようです。

- (1) 「落-ちる」を強く息をつめて言うために、その間に「こ」がはいって「落っこちる」となるのだという説と、
- (2) 「落ちる」のあたまへ「おっ」と息をつめて言うので、それを「落ちる」の〔o〕に〔k〕音がついて〔ko〕と受けとめたのが「おっ kotiru」である。すなわち「おっこちる」は「落っこちる」でなくて「おっ^こ落ちる」なのだという説です。

ギリシア・ペルシアの発音

【問】 国語シリーズ27「外来語の表記 資料集」に記載されている記事について質問します。

53ページにギリシア（Greece）とありますが、それはほんとに「ギーリーシーア」と発音させるつもりですか。語尾の“-ia”は〔ア〕と読ませるという原則に引かされたものと思われませんが、不自然です。ペルシアは記載がありませんが、

ある教科書に用例がありました。

【答】 1 : 「ギリシア」は、いちおう〔ギリシア〕と発音するつもりです（3音節の〔ギリシャ〕でなく）。ただし、最後の〔ア〕は、「わたり」で〔ヤ〕、または〔ヤ〕に近くなるのは普通の音声現象ですから、そのへんは自然にまかせて発音することになると思います。ペルシアも当然です。

2 : それは「不自然だ」という御感想は「発音」についてのことと了解しますが、それは〔ーア〕をはっきりと〔ア〕と発音しようとするればそうですが、上述のように「わたり」音の自然性を尊重すること、および〔ギリシア〕でなく〔ギリシ^ーア〕と平ら型に発音する（それが自然である）ことによって、いくぶんでも不自然な感じを取り除かれると思いますがいかがでしょうか。

3 : おって、御承知のとおり「ギリシア」は Graecia からきたものと考えられており、そのの逐字訳からはじめ「ーシア」、後に「ーシャ」、さらに今日ではふたたび「ーシア」に帰っていくという動向にあるかと思われます。つまり、表記面では原つづりの字面が強くものをいうわけです。

アクセントの指導

【問】 国語科においてアクセントの指導をもっと重視する必要はありますか。

わたしは、アクセントも直せば直る。ラジオの普及がそれを助ける。交通の発達と、いろいろの全国的な催しが多くなるに伴い、語法・アクセントの共通化を促進する必要があると思うのです。

【答】 ことばは必ず発音を伴い、発音は必ずアクセントを伴っているのですから、その教育の必要なことはお説のとおりです。ことに新しい理念における音読の教育においては、いっそうそのことが強く感じられましょう。ただ、その指導方法がたいせつなので、その点、慎重に研究・くふうすることが必要です。

戦前の国定教科書では、第1に同音語をアクセントで言い分ける語いについて注意し、それらはいちいち教師用書に示してありました。たとえば「橋のハシ」と「箸のハシ」など。おそらく、このへんがアクセント教育の最低線ではないかと思えます。

つぎに、これらのアクセントについても、東西の2大方言系統で逆になっているのがありますから、そのちがい（まちがいではない）について相互に自覚しておくことが、ただちに国民的な相互理解の場を広めることにもなるので、この点が第2に注意すべきところでしょう。

(2) 標準語

「わたし」と「わたくし」

【問】 「わたし」と「わたくし」と、どちらが一般的でしょうか。

【答】 国語審議会から建議された「これからの敬語」に、

1) 「わたし」を標準の形とする。

2) 「わたくし」はあらたまった場合の用語とする。

とあります。(実際にもだいたいそうだと思います。)

これまで英語の “I” にあたる日本語は何かと問われて、だれでもちょっととまどっていたのですが、これからは言下に「わたし」だと答えられるようになりました。

“you” に対する「あなた」でもそうです。

「川原」は「かわ-ら」か「か-わら」か

【問】 「川原」を「かわら」というのは、「かわーら」と解釈すべきでしょうか、「か-わら」と解釈すべきでしょうか。

【答】 「川」を古く kafa といっていた時代を想定してみますと、kafa-fara—kawa-wara—kawa-ara—kawâra—kawara というふうになったと考えてはどうでしょうか。したがって、「か-わら」よりも「かわ-ら」と考えるほうが妥当かと思い

ます。このような例は、「はいる」を hafi-iru—hawi-iru—hawiru—hairu と考えて、旧かなで「はひる」書くのと同じ類でしょう。

「ニホン」に一定せよ

【問】 「日本の国名は憲法制定のときニホンと決まったのに、一般にまだニッポンと呼ぶのは国名が不安定で実に遺憾である。善処を願います。

【答】 ニホンというのは憲法制定のときに決まった、いわば既定事実のように思っているようですが、そういう事実はなく、当時の金森国務大臣から、昭和21年7月12日の第10回帝国憲法改正特別委員会で次のように述べています。

（前略）随テ今オ答ヘ致シマストコロハ、今日ノトコロデハ何トモハツキリ決メテ居リマセヌ。ドチラデモヨロシイ。

また、戦争中はニッポンで、戦後には平和国家として、ニホンということになったと考えている人もあるとみえて、実際にそういう質問を受けたこともあります。そういう事実もありません。これについては付録の「国号『日本』の読み方について」を参照してください。

(3) 敬 語

「お」のつけ方

【問】 おの字について質問します。ラジオを聞いても、雑誌を読んでも、人と会話しても、こんなことばには「お」をつけないでもいいだろうにと思うことばに、高い教育を受けた女性や学校の男女教員その他の人が「お」をつけて使っています。国語審議会では、「お」をつけて使ってよいことばといけないうことばはどんなに審議しているのですか、教えてください。

「お」をつけなくてもいいようなことばに「お」をつけて使うため、よく理解できないときがあるのです。たとえば「おみかん・おりんご・おにんじん・おだいこん」などは、かんで理解できますが、「お外に行きましょう。」その他すぐには理解できないことばがあるのです。固有名詞にまで「お」の字をつけるのです。

【答】 「お」のつけ方について、たいへんよいところへお気づきになりました。

「お」の字をつけすぎるので、それを反省してほしいということは、国語審議会では昭和27年に発表しました。「これからの敬語」の中の第4項の

4 「お」「ご」の整理

- (1) つけてよい場合
- (2) 省けば省ける場合
- (3) 省くほうがよい場合

の例などがそれです。「これからの敬語」は「国語問題問答第3集」にのっています。

もともと「お」をたくさんつけはじめたのは、むかし京都で宮中に仕えていた女官たちからなので、今でも女性のことばに多く残っています。ですから、これからも女性が主となって反省する必要があります。

それについて、幼稚園の女の先生に気をつけていただきたいということを、「これからの敬語」の中に

9 学校用語

- 1) 幼稚園から小・中・高校に至るまで、一般に女の先生のことばに「お」を使いすぎる傾向があるから、その点、注意すべきであろう。たとえば

(お) 教室 (お) チョーク (お) つくえ

(お) こしかけ (お) 家事

といってありますが、なお31年には話しことば部会の報告として、「話しことばについて」を発表し、その中の第2項「話しことばの教育」の中で次のように述べてあります。

幼稚園で使われることばに、たとえば「帰りましょう」を「お帰りしましょう」とか「絵をかきましょう」を「お絵かきしましょう」というような言い方があり、その改

善についてはすでに一部では有益な研究が行われているが、幼稚園教育のきわめてたいせつであることにかんがみて、なお全国的に研究を進められたい。

この「話しことばについて」の全文は、「国語問題問答第5集」にのっています。

「申す」

【問】 わたしは、これまで目上の人に対して「母もこのように申しておりました。」と申しておりましたが、あやまりでしょうか。

【答】 「申す」は、古書に「^{まう}奏す」「^{まう}白す」とも書いてあるように、原義は目上に対する敬語に限っていたのですが、今日ではいまひとつ別の意味ができました。それは「言う」ということの上品語に使うのです。

(1) 原義の敬語としての用例

○申し上げます。

(2) 転義の上品語としての用例

○お申し越しのこと

これは「仰せ越し」ともいいますが、普通は「お申し越し」のほうを使います。

○お嬢さんによろしく。

ありがとうございます。よく申し伝えます。

○先生：お子さんには、やはり一言注意しておいてください。

父兄：よく申しきけます。

「お申し越し」と「お申しいで」

【問】 「申す」は自分をへりくだってという敬語ですから、「お申し越しのこと」とか「お申しいでください」というのは失礼になるのではないのでしょうか。「仰せ越しのこと」「仰せいでください」というのが正しいのではないのでしょうか。

【答】 確かにそういうことになるわけですが、ただ、「お申し越しのこと」「お申しいでください」はすでに一般の通用となって大衆的に耳なれた慣用語句になってしまっていると考えられますから、これは標準的な語法として認められることになるでしょう。

ただし、「仰せ越しのこと」ということは、今日でも使えるりっぱな敬語法だと思います。

「仰せいでください」はかえっておかしきこえましょう。「仰せいで」という言い方は、戦前、宮廷用語として「仰せいだされました」と言いました。

以上、「仰せ越し」「お申し越し」「お申し出で」などは慣用語句として使うが、その他では「申す」を相手の言うことに使うのは誤りだというのが現代社会の通念です。ですか

ら「あなたが申されました。」というのは誤りで、これは「あなたがおっしゃった。」と言わなくてはなりません。

なお、次のような「申す」も本義を離れて使われています。

どうぞ、奥さんによろしくお伝えください。

(このとき「よろしく申してください」は誤り。)

ありがとう。申し伝えます。

これは「いい伝えます」では伝説みたいな意味になるので、それを避ける心持からきたものであるかも知れません。

(4) 官 庁 用 語

やわらかい官庁用語にしてほしい

【問】 官庁から出される文書には味のない、親しみにくいものが多いようですが、何とかもうすこし、わたしたちが日常使っているような、やわらかい話しことばに近づくように改められないものでしょうか。尊敬語を使わないまでも、せめていいねい語ぐらいは使っても決して意味を不鮮明にすることもありますまいし、また、一般社会のことばづかいの指導にもなることと思います。

【答】 官庁の文書が固いというのも、けっきょくは起案者によるものであって、官庁から出る文書の全部が全部固いものばかりではないと思います。この方面のことについては、「公用

文作成の要領」というものが政府から出ています。一般に起案者はそれによって感じのよい文書を作ろうとずいぶん努力しているのです。「公用文作成の要領」によりますと、たとえば文章は「原則として『である』体を用いる」としてあります。これは「なり」や「候」などの文語体をやめて、口語体で書くということを表わしたものです。また、「ただし、公告・告示・掲示の類、ならびに往復文書（通達・通知・供覧・回章・伺・願・届・申請書・照会・回答・報告等を含む。）の類は、なるべく『ます』体を用いる。」というような規定もあります。したがって、書式の改善に伴って、たとえば御許可願います。

というような許可願に対して、

許可する。

というようなちぐはぐな回答もおいおいなくなりました。

（５） 文 法

「ある」の活用の種類

【問】 口語の「ある」は、未然形で「あらない」とはいいませんから、変格活用だと思います。それを五段活用とした教科書があるのはどうでしょうか。

【答】 文語で「あり」を変格活用といったのは、その終止形を

「あり」といった1点によるのです。ところが口語ではそれを「ある」というようになって、普通の五段活用と同じになったのですから、文語で変格活用といった理由がなくなりました。それで大きく五段活用の同類にはいったものとして取り扱ったのでしょう。それに、敬語で「あられる」とか「あらせられる」とかの言い方もありますから、「ある」にまったく未然形がないとはいえません。ただ、打消の「あらない」という形がないだけです。

一般に活用表は類型的なものであり、すべての語に、すべての活用形やその用法がもれなくそなわっているというわけのものではありませんから、「ある」においても、打消の「あらない」は「ない」で代用するというふうに注意しておけばよいのではないのでしょうか。

「に」と「へ」

【問】 「水の中へしっぽを入れておくと」「しっぽを水の中に入れたまま」また「門の中へはいります」「門の中にはいっていきました」など、「に」と「へ」の使い方について教えてください。

【答】 「に」と「へ」とには、はっきりと用法を異にしている面（例1）と、そうでなく混用している面（例2）とがあります。

例1 ○ここにいる。(×ここへいる。)

○あっちへ行け。(×あっちに行け。)

例2 ○山にのぼる。

○山へのぼる。

多くの例を見わたして、だいたい、文語的伝統で「に」と言うべきところを口語で「へ」と言うことが多くなっています。その理由についてはいろいろ考えられていますが（たとえば舌頭音の退化現象の一つと見るなど）、まだ学界の定説はありません。

お問合せの例は、第1例を除いて、上の例2のほうなので、その適用は、ただ文の調子によったものでしょう。したがって、どちらもまちがいではないと思います。

第1例は、「水の中へしっぽを入れておく。」の下線のよ
うに続くと考えるときは、「に」とするのが妥当でしょう。

「できるかぎり」の品詞

【問】 「できるかぎり」という語の品詞について次の二とおりの意見が出ました。

(1) 副 詞

(2) 動詞＋形式名詞

【答】 語句構成上は(2)のとおりですが、それを一つのまとまった語句としては副詞（または副詞相当句）です。そして、これ

は「できるかぎり（において）」の省略だと考えてよくはないかと思います。

（6） 日本語教育

日本語のむずかしさ

【問】 日本語は、外国人にとってむずかしいというようなことを聞くことがありますが、それはどういうことですか。

【答】 教育上や社会生活の上から、国語の書き表わし方の複雑なことが問題となって、それを解決するために、国語政策が実施されてきています。しかし、他の言語と比べて、日本語がむずかしい言語かどうかを決めることは、容易ならぬ問題です。

他国の言語は、だれにとってもむずかしいものです。その中で、日本語が特にむずかしいかどうかという問題なのですが、一般には、日本語は、いちおうの話をするだけならやさしい習いやすい言語であるが、正確に話すとなると、助詞や助動詞などの使い方が微妙で、男女・年齢・社会関係・身分のちがいによって言い方が異なるので非常にむずかしく、まして世間普通の漢字かなまじり文の読み書きとなると、学習のきわめて困難な言語だといわれています。

こういう点について、外国人学生が実際にどう感じている

か。国際^{キリスト}基督教大学で調査したものがりますので、資料としてあげておきました。資料2「外国人学生の感ずる日本語のむずかしさ」をごらんください。

2 かなの問題について

(1) かなの使い方

「三ヶ年」か「三か年」か

【問】 教科書では「三か年」と書いてあるところを、読み物によっては「三ヶ年」と書いてあるものがあります。「ヶ」はかたかなの「ヶ」なので、こどもは「三け年」と読みます。「ヶ」は「か」と読む漢字ですか。

【答】 もとは「个」と書いた漢字で、音は「カ」です。「竹」の字の片方で、「箇」の字のもとです。

そういう字で、「三ヶ年」の「ヶ」は漢字のつもりで書きはじめられたのかかもしれませんが、今日では漢字とは考えられないので、「三ヶ年」は「三か年」と書くように公用文では決まっています。それを「ヶ」で書くのはまだこれまでの習慣が残っているので、おいおいに改まることと思います。

鳴き声の「ブーブー」

【問】 ぶたの鳴き声などの「ブーブー」は、どう書くのがよいでしょうか。

【答】 かたかなでは「ブーブー」と、ひらがなでなら「ぶうぶう」と書くのがよいと思います。（さらに「ぶーぶー」と書いても必ずしも「誤り」だとはいえません。）

人間が「ぶうぶういっている」というほうには「ぶうぶう」がよいと確言することができますが。

「ウインドー」か「ウィンドウ」か

【問】 辞書によっては「ウィンドウ」とありますが、そういうふうに教えるのでしょうか。

【答】 ウィンドウ (window) というのは英語の発音に近くかな書きしたのであって、外来語としてはウインドーと書く（ウィンドウとは書かない）ことに国語審議会の案ではなっています。（国語シリーズ27「外来語の表記 資料集」14ページ参照。）

「オホーツク海」「カムチャッカ」「ウオツカ」

【問】 「オホーツク海」と「カムチャッカ」と「ウオツカ」の正しい発音と書き方はどうなのでしょう。

【答】 (1) 「オホーツク」の「ツク」は原語で〔-tsk〕の発音ですから、その「ツ」を大きく書きます。「ツ」を1字だけ離していえば〔tsu〕ですが、「ク」に続くと自然に〔tsk〕とな

ります。

(2) 「カムチャッカ」と「ウオツカ」の「-ツカ」は、原語の発音で「-tka」ですから、「ウオ-ツカ」でも「ウオツカ」でもありません。むしろ「ウオトカ」と書いて、その「ト」を軽く言えば原語により近く聞えましょう。

が、日本語の中に取り入れた外来語としては、「ウオツカ」でも「ウオッカ」でも「ウオトカ」でも、とにかく標準の書き方なり読み方なりをきめればよいのであって、その点、外国語の勉強とはちがうわけです。国語審議会の部会報告（国語シリーズ27「外来語の表記資料集」所収）には、「ウオツカ」とあります。

「カムチャッカ」の「-ツカ」も「ウオツカ」の「-ツカ」と同じで、すなわち「-tka」ですから、これも「カムチャトカ」とか「カムチャツカ」と書いてよいところですが、明治以来、多くは「カムチャッカ」と書いてきました。こうした外国地名の書き方および発音についての標準を決定することは、明治以来、文部省としても久しく努力してきたところであり、また今日でも努力しています。

(2) かなづかい

2 語連合ということ

【問】 「現代かなづかい」の第3項の「ただし書き」の(1)に、

二語の連合によって生じたぢ・づは、ぢ・づと書く。
とありますが、それならば「地震」も「ぢしん」と書くべき
でしょう。これも2語の連合によって生じた「ぢ」です。た
だ、上に來たか下に來たかのちがいだけであって、2語の連
合によって生じたぢである点は同じです。この点が新かなの
最も理解しにくいところで、われわれのグループではみなそ
ういっています。

【答】 2語の連合によって生じた「ぢ・づ」というのは、その2
語の中での下につく語の頭が、1語では「ち・つ」であるも
のが、その上に他の語がついて「ぢ・づ」となった場合だ
けをさすのです。すなわち「○-ぢ」「○-づ」というふう
に。

例	-血	鼻-血
	-月	三日-月

この「血」や「月」が上につくときには決して「ぢ」や「づ
き」にはなりません。

「地震」はどうかと申しますと、その「地」に元来「ち」
と「じ」との2音がそなわっているので、上についても「じ」
だというわけです。下でも同じく「じ」なのです。

もっとも、その「じ」は、旧かなづかいでは「ぢ」と書く
のですが、それを現代かなづかいの第3項の

「ぢ・づ」は「じ・ず」と書く。

というきまりによって、あたまから「じ」と書いているわけ

です。

「がっかい」か「がくかい」か

【問】 「学会」は「がくかい」と書くべきか「がっかい」と書くべきか。

【答】 「がっかい」と書きます。すべて「つまる音」は「っ」と書くというのが現代かなづかいのきまりです。

(3) 送 り が な

「返えす」「帰えす」か「返す」「帰す」か

【問】 「返えす」「帰えす」という送りがなをよく見ますが、それを認めていいのでしょうか。

【答】 「返す」「帰す」がむしろ正しい送りがなだといっているでしょう。これを「返えす」「帰えす」と書くべき理由はありません。しいていえば、「^き帰す」と読まれるおそれがあるといえはいえませんが、それは弱いようです。ことに「^{へん}返す」などということばはないので、「返す」にはそれもあてはまりません。

「聞える」か「聞こえる」か

【問】 ある教科書には「聞こえる」とあり，ある教科書には「聞える」とあります。また辞書には「聞える」とあります。教育上困っていますから，現代かなづかいとしてはどちらが正しいか，お答えください。

【答】 これは「送りがな」の問題であって，「かなづかい」の問題ではありませんから，「現代かなづかい」にはこれについての規定はありません。

送りがなについては，現在のところでは，いちおうこちらのほうを標準としようといっても，そうでなければ「誤り」だということはできない段階にあります。

それゆえ，現在のところ，「聞える」でも「聞こえる」でも，ともかくその教科書の全体に統一があれば検定は通ることになっていますので，それでお示しのような結果になるのです。ただいま国語審議会で審議中ですので，結論が出れば，しぜん各教科書の送りがなも原則的には統一されることになると思います。

現在のところでは，

第1に自校で使っている教科書によって教えていくこと，

第2に，必要に応じまたは機会をみて，他の方式もある
ということをお教えること

が必要と思います。たとえば、「聞こえる」と教えておいて、「聞える」とあるのをみても、必ずしもそれは「こ」が落ちているのではないということを了解させておくべきです。

「生まれる」か「生れる」か

【問】 「生まれる」は「生れる」でよいと思いますが、近来は教科書一般に「生まれる」とあります。その理由はどこにありますか。

【答】 お説のように「生れる」でよいわけで、現在、社会で広く通用しています。

が、一面、「生む」「生まれる」とならべて考えて、むしろ「生まれる」と書きたいという要求もあります。教科書の「生まれる」という書き方は、その線にそっているのです。